中堅の立場から考える

◎雪松 里佳[1)]、鈴木 裕介[2)]、藤村 博和[3)]、倉村 英二[4)]、小笠原 志朗[5)]、岡崎 一幸[6)]、見谷 敦司[7)]
兵庫医科大学病院 臨床検査技術部[1)]、社会福祉法人恩賜財団済生会 大阪府済生会野江病院[2)]、滋賀医科大学医学部附属病院[3)]、公益財団法人 天理よろづ相談所病院[4)]、公立那賀病院[5)]、京都大学医学部附属病院[6)]、福井赤十字病院[7)]

免疫化学検査技師に必要な知識、技術について、中堅の立場代表として 4 つのテーマで考える。

■分析機器に愛情を、検査結果から不思議を

これからの免疫化学検査を担う臨床検査技師に対し、日々の「業務」を淡々とこなすだけの「作業」にしてほしくないという思いが、中堅の立場の共通認識として存在する。

我々の業務において必要不可欠な分析機器だが、測定原理や取扱いを知らないと、担当者の業務は分析機器のスタートボタンを押す「作業」になりかねない。我々はボタンを押すだけの「作業者」にはなるべきではない。そのためにその機器がどのような仕組みを持ち、どのような反応を見せるのかを理解する。結果、それが機器を用いた分析業務や機器そのものにも愛情をもって接することにつながっていく。

今日では機器の自動化が進み、検査結果自体は誰でも出すことができる。ただし、検査結果を正しく理解できないと、「作業」として検査結果を送信するだけの人になりかねない。我々は、結果の送信を一作業に留めず、「業務」として検査結果を読む力を身につけるべきである。検査結果を読むための一番の近道は、日々の検査結果をルーチン業務として受け流すのではなく、都度遭遇した検査結果に疑問や違和感を持つことである。そして、その“不思議”を放置せず、同僚や先輩と気軽な RCPC を行えば、知識と経験が“知見”に変わっていく。身近な先輩から知識と経験を吸収し、疑問に思ったことは個々で調べ、始めは真似をするところからスタートさせる。さらに臨床検査医や診療科から、我々の渡した検査結果がどのように役立っているのかをフィードバックして貰い、検査結果の意義と質を高めていく。そして“知見”を整理して確実に習得すると同時に、他の臨床検査技師との共有財産にするため論文化を心がけていきたい。

■検査室内での役割

免疫化学検査技師にとって精度管理の知識は必要不可欠である。免疫化学検査技師の強みは、毎日の精度管理業務を通じて精度保証という概念を自然と身につけていることが挙げられる。さらに 2014 年に臨床化学会が認定臨床化学・免疫化学精度保証管理検査技師を制定したことからも、免疫化学検査技師に対する精度保証業務への期待が感じられる。認定資格者がいることは、検査結果の信頼性が高まるだけではなく検査室の信頼にもつながる。精度管理の知識が他部門よりも長けている免疫化学検査技師が、検査室全体の精度保証を把握する環境が整えば、精度保証を担保するうえで重要な役割を担うはずである。

■意識向上

免疫化学検査技師にとって必要な知識と技術を得る前提として、業務に対する高いモチベーションが必須となる。免疫化学検査は苦手意識を持たれることが多く、若手で配属を希望する者が少ないが、やりがいのある分野であり、先輩から後輩への伝承が円滑に運べば怖れるに足らない。若手を指導する先輩が自分の指導が正しいかどうかを日々悩んでいることも考えられるが、不安を感じるのは自身も成長していることと信じ、若手と一緒にやりがいを感じていけたら良いのではないだろうか。そのためにも、中堅の立場としては気軽に会話ができる職場環境の構築、日頃からの円滑なコミュニケーションを心がけていきたい。

■他分野での知識・経験の蓄積

最後に、免疫化学検査技師の将来的展望として他分野の経験が重要と考える。大学病院などでは専門性が求められるため専門知識の習得は当然必要だが、他分野の知識と経験を深めることにより、チーム医療が円滑に進むだけでなくそれぞれの職場における業務領域の拡大にもつながり、一臨床検査技師という立場を越えた存在意義が生まれる。その意味で検査室以外の場所、例えば病棟や救急検査、内視鏡センターでの活躍なども必要な知識と経験であると言える。我々が扱う検査結果は総合的な判断が求められるため、こういった経験は医療人として決して無駄ではない。臨床検査技師としてのモチベーションを上げていくためにも、環境が許す限り積極的に知識と経験を増やしていくことが望ましいと考える。

連絡先：0798-45-6304